

ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾くかかりでした。けれどもあんまりじょうずでないどころではなくじつはなかまの楽手の中ではいちばんへたでしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。

トランペットはいつしようけんめい歌っています。  
クラリネットもボーボーとそれにてつだつています。  
バイオリンもいろいろ風のように鳴っています。  
ゴーシュも口をりんとむすんで、目をさらのようにして楽譜を見つめながら、もう一心に弾いています。

ゴーシュも口を鳴らしました。  
にわかに、ぱたっと楽長が両手を鳴らしました。  
にわかに、ぱたっとと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

みんなびたりと曲をやめてしましました。乐長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテティ、ここからやり直し。はいっ。」  
みんなは今のところの少し前のところからやりなおしました。ゴーシュは顔をまつ赤にして、ひたいにあせを出しながら、やつと今言われたところをとおりました。ほつと安心しながら、つづけてひいていますと、樂長がまた手をぱつとうちました。

「セロつ。糸が合わない。こまるなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなはきのどくそうにして、わざとじぶんの譜をのぞきこんだり、じぶんの樂器をはじいてみたりしています。ゴーシュはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシュもわるいのですが、セロもずいぶんわるいのでした。

「今前の前的小節から。はいっ。」  
みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげていつしようけんめいです。そしてこんどはかなりすすみました。いいあんばいだと思つていると、樂長がおどすような形をして、またぱたっと手をうちました。またかとゴーシュはどきつとしました。が、ありがたいことにはこんどはべつの人でした。ゴーシュはそこで、さつき自分の時みんながしたように、わざとじぶんの譜へ目を近づけて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今のつぎ。はいっ。」  
そらと思ってひきだしたかと思うと、いきなり樂長があしをどんどんふんで、どなりだしました。  
「ダメだ。まるでなつていな。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。しょくん。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやっている僕らが、あの金靴鍛冶だの砂糖屋のでつちなんかのよりあつまりに負けてしまつたら、いつたいわれわれの面目はどう